

「出羽鋼」の郷 奥石見 瑞穂町市木 Walk

2006.6.6.



6世紀 国内で鉄生産が始まる頃の製鉄が見つかった炉今佐屋山遺跡 浜田道 瑞穂 IC 2006.6.6.

島根県 奥石見 瑞穂町市木字生家「生家」と書いて「おぶか」と読む。

山深い谷間に「たたら」の山が点々と続く奥石見の製鉄地帯で、「お産」や「女性」を嫉妬し嫌う「たたら」の守り神「金屋子神」のため、里に降りて産屋を建てて赤子を産むそんな集落があり、「生家・うぶか」と呼ばれていた。そんな集落が中国山地の山奥 浜田自動車道 瑞穂ICの直ぐ近くの谷筋にある。

江戸時代 日本刀の素材として全国的に珍重された奥石見「出羽鋼」の製鉄地帯である。

出かけて知ったのですが、この郷瑞穂町市木の周辺は古墳時代から近世まで、谷筋全体に100箇所を超える多数のたたら跡が点在する大製鉄地帯でした。この瑞穂ICの下には古代 日本で製鉄がはじまった6世紀の製鉄炉が見つかった今佐屋山製鉄遺跡。古代 大陸・朝鮮半島に一番近い製鉄炉である。

古代日本での鉄生産が始まるにあたって、大陸・朝鮮半島からどんな風にどんなルートで伝来してきたのか、またその技術についてもよく判っていない。

そんな意味で大陸に一番近い古代の製鉄遺跡今佐山製鉄遺跡には興味深々。

6月6日午後 晴れ 山口から神戸への帰路 6世紀 日本で鉄生産が始まった頃の今佐山製鉄遺跡とたたら製鉄遺跡が点在する瑞穂町市木地区生家集落を訪ねました。



瑞穂町市木周辺の製鉄遺跡群と市木周辺 中国山地の中広島と浜田を結ぶ交通の要衝 2009.6.6.

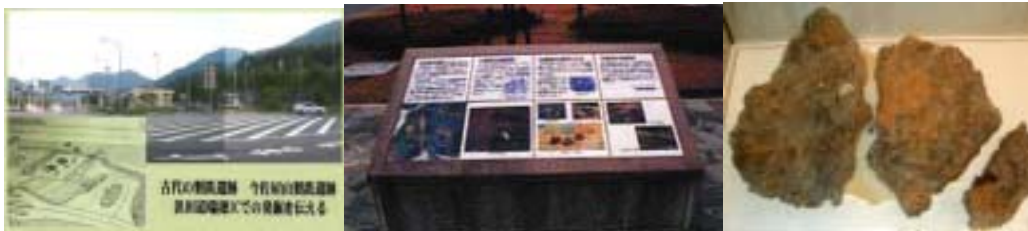
日本で最初に製鉄が行われたのは5世紀まで遡ると思われるが、6世紀後半から7世紀前半にかけて、中国山地や丹後・滋賀県で鉄生産に使われた「製鉄炉」が発見され、確実に製鉄が国内で始まった証拠となった。

広島県世羅カナク口谷遺跡、戸の丸山遺跡 三次市白ケ迫遺跡、  
島根県石見今佐屋山遺跡 奥出雲羽森遺跡  
岡山県千引カナク口谷・大蔵池南遺跡  
京都府の遠所遺跡 滋賀県の古橋遺跡などである。

製鉄開始を告げる製鉄炉については、どちらかという瀬戸内の製鉄遺跡が主に着目されてきましたが、日本海側で朝鮮半島・大陸に一番近い島根県にも6世紀の製鉄遺跡 今佐屋山製鉄遺跡が文献に見られ、製鉄技術の伝来・日本での鉄生産に大きな役割を果たしたに違いない。一体どんなところだろうか・・・と興味深々。

また、この瑞穂町は芸北・石見の境をなす中国山地の一番奥深い奥石見の山里で、後世 日本刀の素材として「千草鋼」とともに最も珍重された「出羽鋼」を産する奥石見の製鉄地帯。江戸期には山を挟んで直ぐ南西の芸北のたたらと一体となって鉄の約80%を産したという。また、後世隆盛を極めた「永代たたら・高殿」たたら形式を中世に確立したのもこの芸北・奥石見の中国山地からだという。

## 1. 今佐屋山製鉄遺跡 鉄の国内生産が始まる6世紀の製鉄遺跡



6.6.午後 山口を出発して約1時間  
広島 千代田ICから日本海側の浜田道の方へトランプス。

今佐屋山製鉄遺跡は古代製鉄のルートが探れる初期の製鉄炉が出た奥石見の遺跡。

とにかく瑞穂ICまでいったらわかるだろう。

場所的には昨年出かけた加計・芸北のたたら遺跡群とは中国山地主稜の南・北側の山間で広島からこの深い山間部を抜けて浜田までの石州街道が通じている。

予備知識はその程度しかなし。

現地へ行き、気がついたのですが、この地は同時に日本刀の素材として名高い「出羽鋼」の大製鉄地帯でした。

### 6世紀 鉄の国内生産が始まる頃の製鉄遺跡 今佐屋山製鉄遺跡

今佐屋山製鉄遺跡を示す説明板と鉄滓（今佐屋山遺跡出土、6世紀後半）  
今佐屋山製鉄遺跡は日本でも最古の部類に属する6世紀末の製鉄遺構。浜田道瑞穂インターチェンジ内のバス停留所横にあり、緑地に整地され陶製の説明版がある。

1989年浜田道瑞穂ICの建設前の調査で土器や住居跡と共に製鉄炉跡が見つかった。丘陵地斜面部の苦地 長さ6m 幅2.5mの中央部に45°四方の焼け土部が見つかり、正方形の箱型炉が1基あったと見られている。隣接して竪穴式住居跡三棟が見つかった。

瑞穂IC建設に当たっては、日本で鉄が生産される頃の歴史的に貴重な製鉄遺跡として埋め戻し整備され保存されて平成元年の発掘調査で、約長さ45cm四方の小規模な製鉄炉が発見され、今から約1400年前（古墳時代後期）の製鉄炉であることが判明。島根県内でも最も古い製鉄炉である。

鉄生産が始まる頃の製鉄には原料として砂鉄と鉄鉱石の二つの原料がそれぞれ使われたが、今佐屋山製鉄遺跡では砂鉄原料と見られる。

山陽道の広島から中国道へトラバースして、千代田 IC を浜田道に入ると極端に車が少なくなる。  
 中国山地の山また山の中へどんどん入って行く。  
 大佐 IC を過ぎて、猪子山トンネルを抜けると島根県の標識がでて、直ぐ瑞穂 IC の標識。



浜田自動車道 瑞穂 IC 周辺 2006.6.6.



山また山で全く人家が見えない。  
 瑞穂 IC の標識でインターチェンジにでるが、やっぱり山の中で  
 人家が全く見えない。ちょっと不安になりながら料金所を出て、  
 事務所の横のところに車を止める。

確か自動車道路の道路部分ののり面が今佐屋山製鉄遺跡と資料  
 には書いてありましたが、通常のインターチェンジの風景で  
 特に遺跡風のモニュメントもなし。多分このインターチェンジ  
 の場所そのものが製鉄遺跡。今佐山遺跡の位置を確かめるため、  
 インターチェンジの事務所に飛び込む。



浜田道瑞穂 IC 全景 右手バス停前の高速道路に沿ったところが今佐屋山製鉄遺跡 2006.6.6.



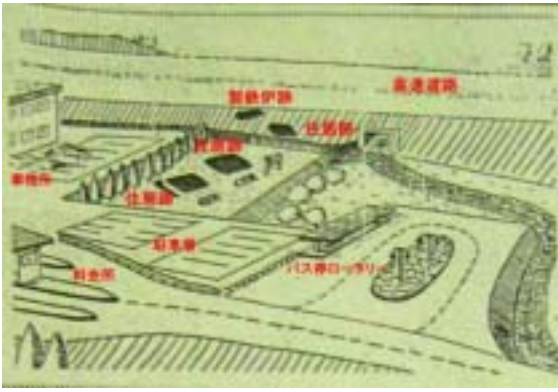
事務所の人が出てきてくれて、直ぐ横のバス停のところが  
 製鉄遺跡だと教えてくれる。

すぐ横の高速道路に沿う緑地が今佐屋山製鉄遺跡で、製鉄  
 遺跡を示す案内表がその真ん中に建っていた。

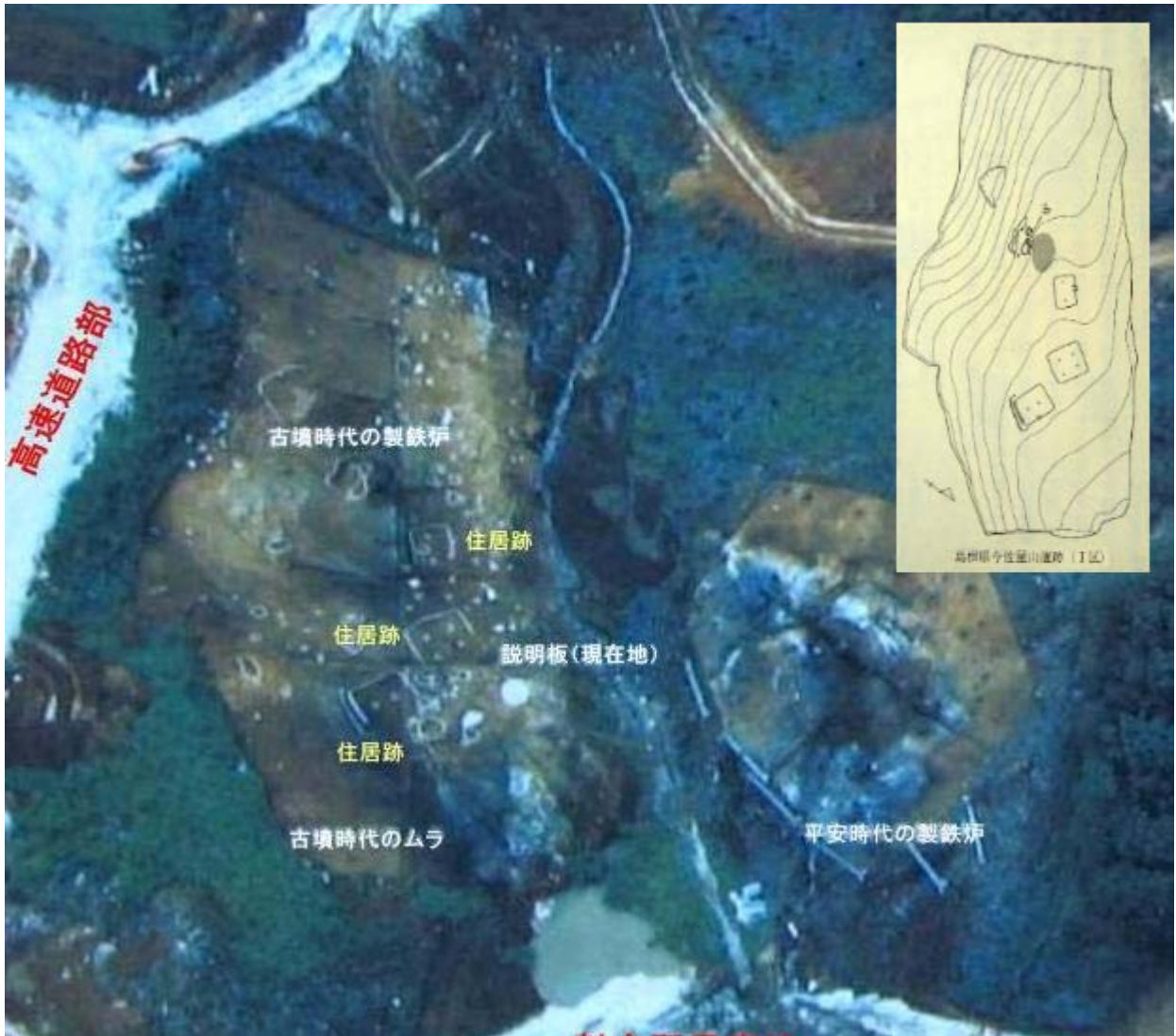
教えてくれた事務所の方が、地元の人で、このインター  
 チェンジ全体が遺跡で、市木の街がインターチェンジをさら  
 に一段下に下りたところにあり、この地区全体どこにも製  
 鉄遺跡があり、特に下の町から谷筋を入った「生家・おぶ  
 か」の集落がたたら衆と関係深い集落で、その地の郷土史  
 家の K 氏を是非訪ねよとアドバイスしてもらう。

まずは今狭屋山の製鉄遺跡である。

案内板のところに立って 発掘時の写真と地形を交互に眺みながら製鉄遺跡の状況を探る。



発掘当時の新聞に掲載された遺跡概略と現在の IC 遺跡のある高速道路東側側面



今佐屋山製鉄遺跡の発掘当時の写真 現地説明板より



遺跡は 製鉄炉1基があるたたら跡とたたら跡に併設する形で3棟の竪穴式住居跡が現在の高速道路の東側側面傾斜部と側面に隣接した平地部から鉄滓や土器片と共に出土した。放射性炭素年代測定の結果からいずれも古墳時代後期6世紀後半のものと考えられている。現在は製鉄炉は側面盛土傾斜地の下 住居跡は隣接する草地の植栽された場所に保存されているという。また、隣接する場所から、平安時代の製鉄炉も出土している。

## 古墳時代の鉄作りムラ

今佐屋山遺跡で鉄を作った人々は、製鉄炉のすぐ近くで生活していました。ムラは、3つの<sup>竪穴</sup>住居からなる小さなもので、ひとつひとつの住居の中からは食事を作るためのカマドや土器が発見されています。

古代の鉄生産には、多数の製鉄炉を用いた大規模なものも知られていますが、この遺跡はムラびとが協力して行った小規模な生産のあり方をよく示す例といえます。



古墳時代の土器



竪穴住居の跡      住居跡内から見つかった鉄滓と伊壁



古墳時代のムラ (想像図)

古墳時代 今佐屋山製鉄遺跡 鉄作りのムラ想定図 今佐屋山遺跡案内板より

たたら跡は長さ 6 ㍎ 幅 2.5 ㍎で、その中央部に初期製鉄炉をまさに思わせる小さな 45 ㍎四方の焼土部があり、ここに正方形の小さな箱型炉があったと考えられている。炉の下の地面を深く掘りこんで作ったような防湿構造はまだなく、斜面に沿う東西方向の両側が排滓場になるように据え付けられ手いる。製鉄炉の直ぐ下には 竪穴住居が 3 棟建っていて小さな村を形成していて、一つ一つの住居からはそれぞれカマドや土器が発見されている。



古墳時代の鉄作り (想像図)



鳥取県今佐屋山遺跡 (I区)



鳥取県今佐屋山 (I区)

出土した製鉄炉の概要      遺跡案内板 & 村上恭通「倭人と鉄の考古学」より







今佐屋山製鉄遺跡 現状外観と出土した鉄滓      植栽部が竪穴住居跡部

この市木地区は中国山地の奥の奥であるが、現在も高速道路 浜田道が瀬戸内側の広島から日本海側の浜田へ抜けている。古墳時代にすでにこのあたりに瀬戸内と日本海とを結ぶ道があったかどうかは判らないが、この地は古くからの本州横断の重要路 江戸時代には広島・浜田を結ぶ石州街道として賑わったという。

炭は無尽蔵に得られる中国山地の中である。また、後世この地が大たら製鉄地帯となったごとく隣接する山・河には砂鉄・鉄鉱石があった。古墳時代にもそんな製鉄原料を求めてやってきた製鉄集団がこの地でたたら製鉄を始めたと考えられる。

渡来系の集団だろうか・・・それとも延々と鉄鍛冶技術を磨いてきた倭の集団だろうか・・・

また、日本海側からやってきたのだろうか・・・それとも瀬戸内側を系譜してやってきたのだろうか・・・まだまだ謎は多い。

鉄の伝来後 500 年をはるかに越える長きに渡って国内での生産が出来なかった時代を経て、朝鮮半島・大陸からの新しい技術に従来技術と合わせて国内生産が始まったと思われる。

大和王権が誕生して中央集権の日本統一を推し進めている時代 鉄はいくらあっても足りない時代である。

数多くの鉄技術集団が大陸・朝鮮半島から渡来し、既存の集団と一緒に各地で鉄の国内生産を試みたに違いない。

この今佐屋山製鉄遺跡のある石見の直ぐ東には出雲・伯耆・丹後と続きたたら製鉄の先進地。南に中国山地を越えれば、芸北から吉備・播磨へと続きたたら製鉄の先進地がある。古代の鉄の大生産地帯である。

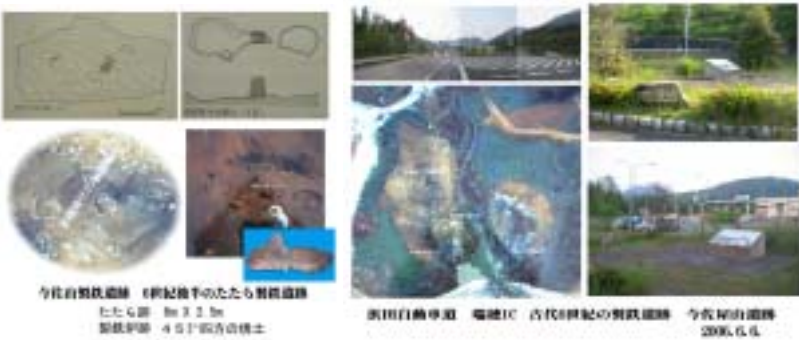
この今佐屋山製鉄遺跡はそんな時代 鉄技術の先進地である大陸・朝鮮半島と王城の地大和とを結ぶ道の本州で最も西で出土した初期の製鉄炉。この石見での製鉄遺跡はまだ未調査のものが多くといわれており、今後新しい発見が次々にでてくると期待されている。

日本で製鉄が始まる初期の製鉄遺跡はどんな風であったのか・・・

また 王城の地大和へのつながりはどのようなだったのか・・・

国内での鉄生産が始まる古墳時代のいまだに解けぬ謎である。

数多くの伝承が残る石見国での製鉄炉 そしてたたら跡。今後 この地がひとつひとつ「たたら製鉄の謎」を解き明かす鍵になるかもしれない。



島根県 奥石見 瑞穂町市木 浜田道 IC 今佐屋山製鉄遺跡

## 2. 「出羽鋼」の製鉄地帯 市木「生家・おぶか」にたたら伝承を訪ねる



瑞穂町市木 観音寺原から生家方面の谷を望む 2006.6.6.



市木周辺の衛星写真



市木周辺の製鉄関連遺跡分布



江戸時代加計隅屋が経営した市木水ヶ迫たたら図



加計隅屋が経営した芸北・石見の鉄山分布図

瑞穂インターチェンジから下へ下ったところが、市木の集落である。周囲を山で囲まれた狭い「ト」の字形の谷間に平地が広がる。この狭い市木の集落を南北に広島と浜田を結ぶ広島・浜田街道（石州街道）の宿場町である。芸北と石見の（広島県と島根県）の国境をなす中国山地 猪子山を越えて石見に入ったところが市木で、現在は浜田道がトンネルで猪子山を抜けて市木の集落に入り、浜田へ下ってゆく。西へ曲がって狭いが緩やかな谷あい抜けてゆくと瑞穂町の中心鱒淵・出羽である。その中ほどが「生家・おぶか」の集落でこの緩やかな谷間の中を生家川が流れ下る。この「ト」字の谷間全体に古墳時代から近世までのたたら跡が点々と広がっている。

加計隅屋経営の芸北の鉄山分布と島根県遺跡データベースからプロットした瑞穂町市木周辺の製鉄遺跡分布を併せるとこの中国山地一体の製鉄遺跡分布の濃さがわかる。

「生家・おぶか」に残る「たたら衆がお産の時には生家の里まで山を降りて、ここに産屋を建ててお産した」との伝承もこれだけ多くのたたら跡分布を見ると本当だろう。

江戸時代この市木を含む芸北・石見の中国山地は全国の約 8 割の鉄を生産した大製鉄地帯の中心部で、芸北のたたら製鉄を束ねた加計隅屋はこの石見市木・猪子山でも鉄山を運営していた。また、市来から西へ広がる瑞穂町のたたら地帯の西端に「出羽」があり、この地が生産する「鋼」は日本刀素材の三大「鋼」(「千草鋼」・「出羽鋼」・「印賀鋼」)のひとつ「出羽鋼」の名の由来となっている。また この「出羽」の地には古くから刀鍛冶集団がいて、「出羽鍛冶」の名とともに名声を博した。

## 市木「生家」の里に残るたたら伝承

### 「生家・うぶか」地名の由来

滝ヶ谷川や生家川の上流の谷間周辺では「たたら製鉄」が盛んに行われ、製鉄に従事する人々が多く生活していた。

「たたら」の神様「金屋子の神」は 子どもが生まれることが嫌いなので、たたら衆のお産の時は谷を降りて、産屋をつくりお産をした。

それで、今では その集落を生家(おぶか)と呼んでいる。

中国山地の最深部市木は瀬戸内側の広島と日本海側石見・浜田に結ぶ石州街道の宿場町。

南の猪子山から北へ市木の集落を経て狭い谷あいを北に流れて江の川に合流する八戸川。

この八戸川に東の狭い谷間から流れ下る生家川が市木の集落観音原で合流する。

これらの川の流域にはかつて豊富な森林資源と砂鉄を利用して古代から近代まで数多くのたたら製鉄が営まれた日本有数の製鉄地帯でもあつた。

日本で製鉄の始まる 6 世紀後半の今佐屋山製鉄遺跡も八戸川の西岸の谷筋(現在は浜田自動車道瑞穂 IC)にある。また、江戸時代 日本刀の代表である「石州刀」を支えた「出羽鋼」の大産地であり、広島藩加計の隅屋も市木の南 猪子山に大鉄山を営んでいる。

市木の町へ東から流れこむ生家川の谷間は田所地区小林と市木地区を結ぶ谷でその中流滝ヶ谷川との合流点にある集落が「生家(うぶか)」。

「生家(うぶか)」の名の由来にはこの谷筋の山中に多数点在した「たたら」と絡む「生家(うぶか)」地名伝承が今も残り、この地帯が大たたら製鉄地帯であったことを示している



たたら郷 市木 生家・うぶか の里 2006.6.6.

今佐屋山製鉄遺跡から市木の里 大野ヶ原に下り、石州街道沿いに南北に広がる市街地にはいらず、そのまま生家川が流れ下ってくる西の谷筋に入って瑞穂インターで教えてもらった「生家・うぶか」集落の郷土史家 K さ



んを訪ねる。

山裾まで田園が広がる谷筋の一本道に沿って、ぼつぼつと集落があり、その間を抜けてゆく。10分ほど行って谷筋が狭まって、いよいよ道の両側の山がせまって 人家もなくなり山に入ってゆくと感じて、心配になって、車を止め、田園のむこうの山裾の農家を訪ね、表札に書かれた住所に「生家」。このあたりが生家・うぶかである。声を掛けたが留守。どうしようかと引き返しかけると手を振ってこっちへ来る人がいる。

この家のご主人でもうひとりのKさん。郷土史家のKさんの家を探ねると東の道端に見える家がそうだという。

「たたら」を訪ねてこの谷に入ってきたというと、ひょっと西の道の先を指差して、「あの山の下がたたら跡。こっちもそうだ」という。「なんせ ここは「いずう」鉄・石州刀の本場 刀も持っている」といわれる。

「自分も少しはこのあたりのたたら資料持っているので、コピーしておいてあげる」と。

はじめはピンと来なかったのですが、「いずう・出羽」。「出羽鍛冶」の本場とはっと気がつきました。

「生家・うぶか」も最初聞いた時にはどんな漢字なのか判りませんでした。また 漢字から読みを覚えるのに時間がかかった。



生家・うぶか の里 2006.6.6.



生家・うぶかの里 たたら跡がつづくという山にかかる周辺 2006.6.6.

Kさんを訪ねて 入り口を入ると回りの壁いっぱい集めた資料や写真が貼ってある。もうこの地の誰もが知っている古老。「今佐屋山たたらを見に来て、瑞穂 IC で教えてもらったこと。そして この地のたたらの分布や この生家のたたら伝承等々教えてほしい」と目的をつけると、奥から新聞の切抜きや資料を一杯だかえて持ってきて、自分で歩いて集めた市木地区のたたら跡を集計した表や資料をみせていただいたり、資料の写真をとらせてもらったりで、結局1時間ほど色々教えてもらった。

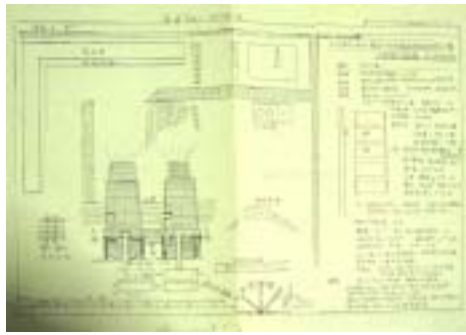
もう一つ 芸北の加計隅屋の鉄山も「石見」から製鉄原料の砂鉄を運んだというが、どのあたりか教えてほしいと聞くと「このあたりの山のあちこちから砂鉄が取れるし、市木から石見町へ抜ける道の原山トンネルを抜けたところから眼下に見える谷筋はどこも砂鉄の宝庫。帰りによるといい」と聞き、この地ではたたら場と炭と砂鉄が全部揃うことに納得しました。

また、市木のインターチェンジを下りたところ観音原に大正年代砂鉄を原料とした溶鉱炉を持つ製鉄所があり、その溶鉱炉と工場の配置を書いた図面を見せてもらった。

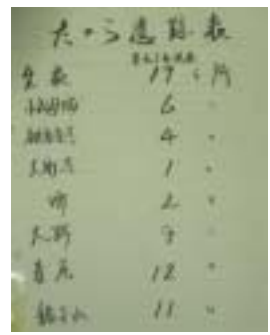
たしか 東北八戸・久慈に行った時にも砂鉄精錬が昭和の時代まで続いたことを聞きましたが、砂鉄を使った製鉄の流れが、つい最近まで、しかも こんな山奥で続いていたことにも驚きでした。



今佐屋山遺跡を伝える新聞（整理）



大正期市木にあつた砂鉄原料の製鉄所



市木周辺のたたら遺跡



市木わたらの里展 開催案内



砂鉄採取相続の願い



わたらの月間出来高報告書

生家・うぶか の古老を訪ねて見せてもらった資料（抜粋） 2006.6.6.

Kさん宅を出たときには もう日も傾きかけ。

もと来た道を戻ると道端に先ほどお会いした Kさんが 瑞穂町史のわたらの項をコピーして待っていてくれた。どうも1時間も待っていただいたようです、本当に感謝です。

たたら衆というどうも「鬼」伝説にあるように、里の人達とのトラブルがすぐイメージされるのに、この市木・生家・うぶか では お産のために山を下りてきたたたら衆を受け入れてお産をさせてあげた。

そんなやさしさが今もある。

行く先々で いきあたりばつたりの風来坊に、親切に声をかけていただき、また色々教えていただいたことと生家・うぶかの伝承をダブらせながら谷を下ってきました。

そして 教えてもらった原山のトンネルの出口まで行って、瑞穂ICまで戻ったときにはもう夕暮れ。



市木から北へ原山トンネルをぬけると砂鉄の宝庫 山々に囲まれた石見町が広がる 2006.6.6.

### 3. 古代石見国のたたら製鉄地帯 芸北と石見国境の市木 を歩いて

中国山地の山また山の一番奥 広島県と島根県の県境（芸北と石見の国境）地帯に広がる大製鉄地帯。古代の今佐屋山製鉄遺跡をちょっと訪ねてかえるつもりが、そこは「出羽鋼」の大製鉄地帯。

まったく出かけるまでは両者が結びついていませんでした。おかげで いろんなことが、頭を駆け巡って 楽しい和鉄の道でした。

また、今回であった「いずう・出羽」

このルーツをたどれば おそらく東北奥州「月山」の「出羽鍛冶」ではないか・・・・・・と。

古代 東北の数多くの製鉄集団・鍛冶集団が俘囚として日本各地にきて、製鉄・鍛冶の技術を広めたという。

そんな一団が後世この石見で「出羽鋼」「出羽鍛冶」の技を広めたのではないか・・・・・・



日本で鉄の国内生産が始まるまで、500年を超える年月を要した謎 いまだ解けぬ謎

日本で製鉄が始まる初期の製鉄遺跡はどんな風であったのか・・・・・・

また 王城の地大和へのつながりはどのようなだったのか・・・・・・

石見には大陸・朝鮮半島と王城の地大和を結ぶ「和鉄の道」が通り、数多くの伝承が残る石見国での製鉄炉 そしてたたら跡。今後 この地が「たたら製鉄の謎」ひとつひとつを解き明かす鍵になるかもしれない。

今佐家山製鉄遺跡・生家のたたら伝承そして出羽鋼と今日一日の walk をダブらせながら お会いした市木の人達に感謝しつつ猪子山のトンネルを抜けて石見の国を後にしました。

206.6.6 夕 浜田自動車道 猪子山トンネルを抜けてつ

Mutsu Nakanishi



参考文献 村上恭通 「倭人と鉄の考古学」  
島根県遺跡データベース

[http://iseki.shimane-u.ac.jp/search\\_menu\\_sitclass.php](http://iseki.shimane-u.ac.jp/search_menu_sitclass.php)

瑞穂町史

生家の郷土史家 河原氏所蔵資料

和鉄の道 10. 「加計隅 屋鉄山絵巻」と加計・豊平町周辺の製鉄遺跡を訪ねて

---江戸時代 広島藩を支えた鉄の道「芸北 加計のたたら」---

<http://mutsu-nakanishi2.web.infoseek.co.jp/iron2/kake00.htm>